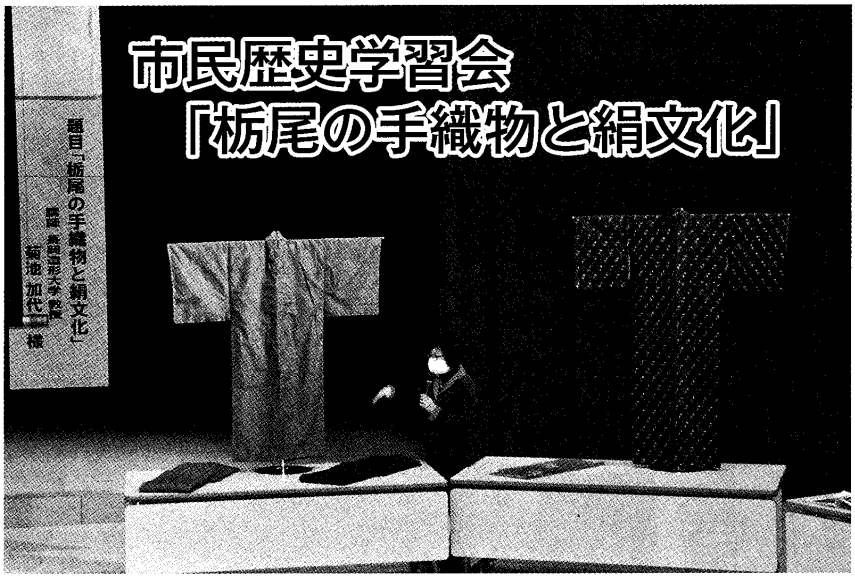
市民歴史学習会「栃尾の手織物と絹文化」



長岡造形大学の菊池教授が栃尾の絹織物について講演

栃尾観光ガイドクラブ（大﨑勉会長）主催・令和３年度第１回市民歴史学習会が12月９日、栃尾産業交流センターおりなすてまりホールで開催された。

栃尾地域では、古くから〝栃尾紬〟と呼ばれる絹織物が織られていて、地域の人々の生活と豊かな文化を育んだ大切な財産として受け継がれてきた。しかし、時代の変化と共にその技術の伝承と特色ある生活の記憶が失われつつある。

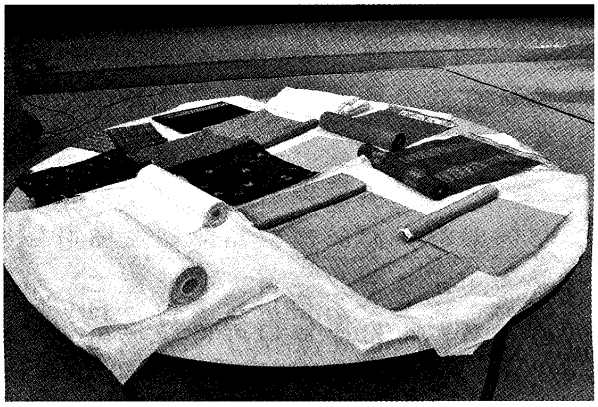
今回は長岡造形大学の菊池加代子教授を講師に「栃尾の手織物と絹文化」の演題で、貴重な栃尾の絹文化を後世に伝えていく事を目指し、これまで行ってきた研究や活動の一端を紹介した。

開会にあたり大﨑会長は「栃尾の織物の歴史について学ぶ機会は少ないですが、菊池先生は昨年と今年、２回にわたって栃尾美術館で織物の展示をやっておられ、今年はまちなかキャンパスで５回の内２回講座を持って頂きました。今日は先生からお話し頂いて、その後、先生も地元から情報を頂きたいということです」と挨拶。

菊池教授は自己紹介した後、「栃尾紬というものは何なんだろう…解らないので研究していますが、皆さんから教えて頂ければありがたい」と語り次のように続けた。（一部抜粋）

―長岡市のホームページに栃尾紬の標本が出ていた。実物は見た事がないが、関係者に聞くと、今は所在不明で判らない。栃堀にある農業資料館に保管していた手織機を分解し、栃尾美術館で展示した。新町のかざぜんさんから糸見本を見せてもらったところ、80頁に７９７点の見本があり、資料的に古く明治、大正頃まで使っていたと思われ、見本の糸は非常に細い。繭から引いている糸だとそこまで細くない。

一之貝の渡辺家で、作っていた方からお話を伺えた。繭から糸を引き、次の工程で朝の４時から夜の９時までかけ一反を織る。基本は家族のものを織り、寝間着もシルク100％。暮らしに必要な物は全て自分で織っていた。一之貝の剣持さんの道具は、県立歴史博物館に寄贈された。本来であれば、地元のしっかりしたところで保管できればいいが、県の保管となると簡単に見せてもらえない。



西中野俣の林熊永さんから端布をたくさん頂き、その中に「着る人の身になって、心のこもった機を織りましょう」と書かれた紙が入っていた。生産を奨励していた時代があった。織柄として田之口は黄縞、森上は無地、荷頃は千筋、中野俣は鼠縞、一之貝は絣、赤谷は大柄、栗山沢は黒地、黄格子、黄八丈を主に作っていた。

このような高度な技術を家庭の主婦が織っていた。「手織りとは何なんだろう」と疑問がわく。一番の基本は現金を得るために養蚕をやり、家族全員が関わる。農閑期の女性の仕事として蚕を飼い機を織っていた。中には蚕が先に使った新聞紙で自分のお尻を拭くのに納得がいかないという人も居たと聞く。

次に残して行くためにはどうしたらいいのか。大学では教授が替わると継続できなくなることがあるから、大学ではダメ。

最後に「私も研究を始めて３年目となりますが、どの資料がどこにあるかキチンと整理して行きたい。見たい時に見れるように出来たらいいと思います」と締め括った。